

清宗根付館 便り

2023年4月1日から展示作品・建物の撮影を解禁しました。

当館は開館以来、作品の著作権の観点から、館内での撮影を禁止しておりましたが、来館者のご希望に沿うべく現代根付作家の方々と協議し承諾を得られたことで、館内撮影の解禁にいたしました。根付はよく人の趣味趣向の数だけ意匠もあるといわれますが、ご来館いただきました皆様には気に入った作品や、心に残った作品を撮影して、旅の記録や記憶にとどめていただくことが可能となります。また適切な配慮のもとでのSNSでの発信も歓迎しております。

さらに、館内の撮影を解禁する前は庭の風景や外観、当館のパンフレットなどをSNS に掲載されていたらしゃるのを拝見しましたが、今後は根付のみならず当館の室内も併せてご発信いただくことができるようになりました。

根付研究 最前線『かぶきの精神性と留具の誕生』

公益財団法人 京都 清宗根付館
学芸員 大西 弘祐 (忠雲)

慶長期（1596年～1615年）前後に描かれた風俗図を概観すると、堤物がそれまでの左腰ではなく、その多くが右腰に佩用され、堤物の佩用のあり方に大きな変化が生じていることに気付かれます。この背景には、刀の装着の変化、上衣となった小袖の普及、そして帯の幅の変化等、服飾をめぐる劇的な変化が考えられますが、これはまた別稿に改めたいと思います。次に佩用の位置ではなく、描かれた堤物そのものに着目すれば、これまでの堤物とは明らかに質の異なる堤物を認めることができます。それは、『四条河原遊楽図屏風』（ライブツヒ民俗学博物館）や『歌舞伎図巻』（徳川美術館）に描かれた、女性芸能者に描かれている堤物です。これは、『洛中洛外図屏風』（福岡市立博物館）の市井の人々が佩用している堤物とは明らかに異なります。換言すれば、後者の堤物が実用的なのに対して前者が装飾的、あるいは、後者が用途を持つ具体的なものなのに対して、前者はあるシンボルを表象するかのような象徴的なものとして描かれています。そして、この装飾的で象徴的な堤物が描かれるところに、はじめて、堤物を帯に留める小器具、つまり<留具>が描

かれるのです。これは、好事家一人が装着していたところをたまたま描いたというのではなく、明らかに社会構造の反映としてある特定の層に描き出されています。留具の形状は環形で、あたかも一つの様式のように、女性芸能者の腰に描かれています。そもそも、この女性芸能者も、それまでの風俗図では描かれることのなかった、この時期に誕生した新たな芸能の演者でした。『当代記』『慶長八年四月条』によれば、「此頃、かぶき躍と云う事有り、是は出雲神子女名は国、但し好女に非ず仕り出で、京都へ上る。縦ば異風なる男のまねをして、刀・脇指・衣装以下殊相異、彼男茶屋の女と戯る体有難したり。京中の上下賞翫する事斜めならず」とあり、この芸能こそが、「かぶき踊り」であり、<殊異相>と形容させた華美な装束の種になったのが、このころ京を騒がせた放埒で常軌を逸した行動を嗜好した<かぶきもの>の姿だったのです。かぶき踊りの創始者である阿国が留具を見出したのか、はたまた彼女が真似たかぶきもの達が見出したのか、想像力を掻き立てられるところですが、いづれにせよ、留具の母胎に、かぶいた精神性があることだけは間違いのないようです。

2023年 10月～12月の特別企画展のご案内

日本の美、ここに極まれり。『根付の品格』展

10月 「日本の美」展

11月 「秋の名品」展

12月 「歴史上の人物」展

■ 10月1日(日)～31日(火)

■ 11月1日(水)～30日(木)

■ 12月1日(金)～28日(木)

京都 清宗根付館 公式ホームページのTwitter、Instagram にて、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。

第9回 水木十五堂賞受賞 (奈良県大和郡山市より授与)
家庭画報(目次頁)に毎月掲載、NHKプレミアム「美の壺」出演

SAGAWA PRINTING

Twitter

Instagram

公式サイトはこちらから▶

佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。

公益財団法人 京都 清宗根付館 とは

当館は、佐川印刷株式会社 代表取締役会長 木下宗昭による「日本のよき伝統を、日本人の手によって、日本に保管したい」という発意によって、ここ文化首都・京都に設立された、日本で唯一の根付を専門とする美術館です。当館では、「新たな挑戦」と「絆」をむね（宗）とし、根付と根付をめぐる文化の継承・創造・発展を目指し、<魅せる><育む><繋がる>を使命に、地域と皆さまに開かれた美術館として活動しています。

現代根付
Contemporary
Netsuke
Newsletter
Salon

SUMMER-AUTUMN Issue. 13

[目次]

■企画展の見所
■根付研究 最前線
■根付館便り

[発行元]

公益財団法人 京都 清宗根付館
〒604-8811 京都市中京区壬生
賀陽御所町46番地(壬生寺東側)
電話 075(802)7000
www.netsukekan.jp/

日本で唯一の現代根付専門美術館 京都 清宗根付館『企画展』のご案内

根付が織りなす不思議な世界をのぞいてみませんか。

『未知への扉』展

夏といって思い浮かべるイメージは様々あります。照り付ける太陽、白く立ち上がる入道雲、けたたましい蝉の声、大海原の潮風などの風景もあれば、お盆と帰省、盆踊りなど家族や友人たちと過ごす行事や、スポーツなどでは大胆に挑戦するなど、ひと夏の経験はかけがえのない思い出となります。また強烈な日差しとは対照的に木陰に潜むひんやりとした気配を感じたり、夜になれば怪談や肝試しにヒヤッとしたりします。夏はいつでも未知への経験へと導きます。そして今年もまた夏が来て、私たちに感動を与えることでしょう。

今夏の清宗根付館では「未知への扉」と題して根付たちが織りなす不思議な世界をご紹介します。
7月は「熱闘！根付館」として心躍らせる熱き闘いの特集します。しのぎを削る攻防と予期せぬ逆転の連続。幾多の勝負の行方をご覧ください。お盆を迎える8月は「異世界の住人たち」として怪談などでおなじみの怖い存在たちがひっそりと登場し、夏の涼を届けます。
初秋の9月は「旅への浪漫」としてまだ見ぬ場所を夢見ながらあなたの心の忘れ物を探しに出かけませんか。

根付が織りなす不思議な世界をのぞいてみませんか。
Curiosity for the unknown world of Netsuke

の未知への扉展

7月展
熱闘！根付館展
Special Exhibition in July
Heated Competition
7月1日 田 - 30日 田
July 1 田 to 30 田

8月展
大初会ことはいの目に見えない！
異世界の住人たち展
Special Exhibition in August
Inhabitants of Another World
8月1日 田 - 31日 田
August 1 田 to 31 田

9月展
心の忘れ物を探しに歩出そう！
旅への浪漫展
Special Exhibition in September
Longing to Travel
9月1日 田 - 30日 田
September 1 田 to 30 田

公益財団法人 京都 清宗根付館
Public Interest Incorporated Foundation
KYOTO SEISHU NETSUKE ART MUSEUM
〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町46番地1(壬生寺東側)

告知ポスター

7月 湧き上がる感動、逆転のドラマ!
■ 7月1日(土)～30日(日)

「熱闘! 根付館」展

夏は幾多のスポーツで熱い闘いが繰り広げられる季節。その栄冠には多くの試練と、一瞬の英断がもたらす駆け引きがあります。応援する方も攻守が激しく入れ替わる展開に誰もが心躍らせるものです。周りを見渡してみると闘いはスポーツだけではなく。日常の様々な場面でも人知れず小さな闘いが行われているのです。勝者には惜しめない称賛と栄誉が与えられます。しかし闘いは勝者だけのものではありません。敗者の悔しい涙には昨日までの情熱と明日への勇気が隠されています。勝負には人生ドラマが凝縮されています。今月は「熱闘!」を題材にした根付を紹介します。

8月 大切なことはいつも目に見えない!
■ 8月1日(火)～31日(木)

「異世界の住人たち」展

毎年 8 月のお盆の時期は帰省ラッシュになりますが、当館では異世界の住人らの陳列ラッシュを迎えます。お盆は先祖の霊に感謝し、供養する風習として、盆踊りは夏を代表する風物詩として親しまれています。そもそもお盆は仏教における「盂蘭盆会(うらぼんえ)」を略したもので、釈迦の弟子 目連尊者(もくれんそんじゃ)が、餓鬼道に落ちた自分の母親を助けるために供養したことに由来するといわれます。お盆には地獄の釜の蓋が開くといわれ、その号令を出す閻魔大王を筆頭に、幽霊や精霊、鬼に妖怪に、さらには神話から宇宙人まで人智の及ばない住人たちが集合します。

9月 心の忘れ物を探しに歩き出そう!
■ 9月1日(金)～30日(土)

「旅への浪漫」展

今まで知らなかった場所を訪れ、初めて会う人、眺める景色、未知の文化に触れるとき日常から解放され、本来の自分らしさを発見します。いわば、心に空いた穴を埋めるためのピースを探すのが旅なのかもしれません。だからこそ人は未知の世界へ、非日常の世界への浪漫を胸に旅に憧れるのでしょうか。根付においても旅にまつわる題材は多くあります。江戸時代は街道が整備され全国で人の往来が多くなり、旅の一大ブームが起りました。全国の名所名跡、旅役者、遠い異郷の偉人たち、前人未到の楽園、珍しい風物や名産品などが並んだ清宗根付館で、あなたを時空を超える旅へとお連れします。



中村 雅俊 (1915～2001)
「川津掛」 高6.1cm
黄楊
相撲の決まり手のひとつ。追い込まれた力士が相手の足を引っかけて首を後ろに引いて押し倒す、逆転の一瞬を表情豊かに彫り出す。



桑原 仁 (1956～)
「熊退治(勇氣)」 高4.8cm
鹿角
狩猟を生業にするマタギは熊を山の神からの授かり物と感謝し、祈りと厳しい戒律のなかで猟をする。両者激突の瞬間。



森 賢次 (1974～)
「フック助」 高4.0cm
鯨歯・べっ甲
江戸時代に幸福を招くと流行した縁起人形の叶福助と招き猫がボクシングのフック(福)を繰り出している。



平賀 明玉齋 (1896～1991)
「驚と猿」 高3.6cm
象牙
驚と猿が争っているように見えるが、仏教では激流に落ちた猿は人間の煩惱を表し、それを救う驚を聖天様(大聖歓喜天)と見立てている。



立原 寛玉 (1944～)
「不覚」 高6.9cm
象牙
強く大きな者がいつも勝つとは限らない。時には小さな鼠が、大きな虎を負かすことさえある。罠にはまった虎の不覚。



奥田 浩堂 (1940～)
「閻魔大王」 高4.2cm
象牙
閻魔は最初に亡くなった人間で死の道を発見したといわれる。閻魔の本地である地藏顔で赤子をあやしながら生前を偲んでいるのかもしれない。



青木 光行 (1932～)
「水の精」 高5.0cm
象牙
童話に登場する水の精は異世界と人間界の境界に棲み、人智を超えた能力を持って人間たちの誠実さを試している。



和地 一風 (1970～)
「宇宙より来たる」 高6.0cm
鹿角
宇宙人も夢をみるのかと問いかけのように宇宙人が宇宙人の根付を手にとって遥かなたの故郷の星に想いを馳せている。



及川 空観 (1968～)
「ヴィーナス(新世界)」 高3.0cm
象牙・べっ甲・真珠
ヴィーナスの目覚めに崇高な新世界の出現を重ね、裏面にはディストピア(暗黒世界)のメタファーを散りばめ、両義的な世界観を提示している。



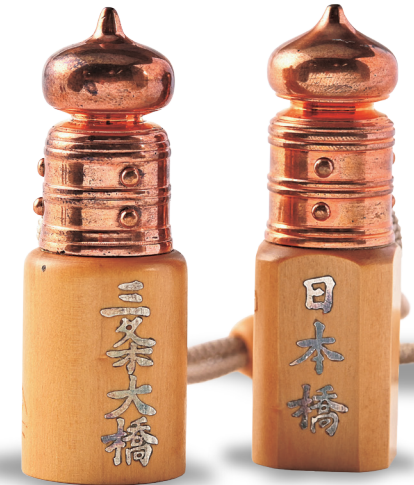
高木 喜峰 (1957～)
「祭ばやし」 高3.2cm
象牙・海松
深夜に徘徊する鬼や妖怪たちの群れを百鬼夜行というのが、この作品では魑魅魍魎の妖怪たちが夏まつりに興じている。



山本 伊多呂 (1961～)
「ドン・キホーテ」 高5.7cm
鹿角
騎士道物語を読み過ぎて現実と区別がつかなくなった老騎士が瘦馬、従者とともに冒険の旅に出る。風車の巨人を倒す夢を見ながら熟睡中。



田神 十志 (1957～)
「旅より お前寒から」 高3.4cm
象牙
村の守り神として村境や路傍に置かれた道祖神は、旅人を最初に出迎える。寒さ厳しい折、道祖神に話し相手になってもらいたい日もある。



「三条大橋」 高6.4cm 黄楊・銅
「日本橋」 高6.4cm 黄楊・銅
宮澤 宝泉 (1942～)
江戸時代に整備された五街道のひとつ、東海道の起点と終点を表した根付。弥次喜多から起こった空前の旅ブームに想いを馳せて。



針谷 絹代 (1959～)
「はち鳥の楽園」 高3.7cm
ブルーアンバー・漆
常夏の楽園に咲き乱れる花々。カラフルなハチドリたちが花の蜜を求めて飛び交う光景は平和の象徴でもある。多くの旅人がこの南国を求めて海を渡った。